

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	沼田 雄
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Long-Term Efficacy of Interventional Bronchoscopy for Severe Airway Stenosis by Endobronchial Tuberculosis: A Single-Center Retrospective Study (気管支結核による重度気道狭窄に対する気管支鏡下治療の長期有効性:単施設による後ろ向き研究)
	掲載誌 Journal of St. Marianna University 2025; 16: 105-111
	主査 井上 莊一郎
	副査 古田 繁行 副査 丸島 秀樹
[論文の要旨・価値] 気管支結核(Endobronchial Tuberculosis:EBTB)は活動性肺結核の6～54%に発生し、区域気管支より中枢の気道壁に感染が及ぶものである。気管・気管支壁に潰瘍や肉芽を形成し、診断や治療開始の遅れも影響し、線維性気道狭窄へ移行しうる。その結果、抗結核療法によって感染は制御されても、気道粘膜破壊後の癒着化や気道軟化が残存し、中枢性気道閉塞、呼吸障害、反復性肺炎が生じうる。外科治療も選択肢となるが、病変の部位や程度によっては難度が高いことや侵襲が大きいことが問題となる。そこで患者の状態や病変の部位や程度によって、比較的低侵襲の気管支鏡下バルーン拡張術やステント留置術が選択肢となる。本研究はEBTBに伴う重度気道狭窄に対する気管支鏡下治療の長期的有効性、安全性、病型別管理の要点を単施設長期コホートから明らかにすることである。対象は2004年4月～2021年1月に、当院で気管支鏡下バルーン拡張術またはステント留置術を受けたEBTB患者14例。診療記録から、臨床経過、気管支鏡治療の種類、再介入の有無、ステント関連合併症の有無、予後を後方視的に解析した(本学倫理委員会承認番号 5536号)。対象14例中、気管軟化症は7例あり、うち5例の病変は気管から主気管支に及ぶものであった。病変が気管単独または気管から主気管支に及ぶのは7例、主気管支に限るのは7例であった。気管・気管支軟化症を呈したのは7例で、病変が気管から主気管支に及ぶものが5例、主気管支だけのものは2例であった。14例中13例にバルーン拡張術が実施され、その8例でステントが留置された。シリコンYステントは気管・気管支軟化症例4例、直型ステントは気管支軟化症例2例、癒着性狭窄2例に使用された。Yステントでは肉芽形成、分泌物付着、感染、素材劣化が高頻度で、8例中7例で交換・再留置を要した。直型は4例中3例で留置4～12年後に抜去でき、以後も開存性が維持され、症状も安定していた。片側主気管支線維性狭窄では、再狭窄は軽微で生活の質は安定していた。合併症群では手技回数と在院日数が増加し、死亡例2例とも軟化症を伴い、窒息や感染が死因であった。本研究は国内では稀なEBTBに対するステント留置術の長期的な有効性を調べ、片側主気管支狭窄では抜去可能例が多く、再留置率が低い点で直型ステント治療が有用なこと、一方、気管や両側主気管支軟化症例へのYステントは抜去困難で合併症発生率と再留置率が高く、治療上の課題が残ることを明らかにした点で貴重な知見といえる。	
[審査概要] 主査1名、副査2名、陪席者数名で審査を実施した。約20分間のプレゼンテーションではEBTBの発症機序、病理所見、病態の説明後、研究方法と結果、考察が述べられた。約35分の質疑応答では、ステント治療と外科手術の適応、線維性狭窄と気管軟化症、病変の出現部位の違いによる症状の違い、ステント治療の限界などについての質問が多くなされた。申請者はこれらに真摯に回答し、ステント治療の今後の展望についても適切に回答した。英語読解能力は、本論文の引用文献の一部を和訳することで評価した。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語(英語)試験等の評価] 申請者は、本研究の対象疾患であるEBTBと、気管・気管支ステント治療に関する専門知識を十分に有しているだけでなく、得られた結果に対して自身の臨床経験も含めて考察する能力を有しており、十分な研究能力を有し、今後も同様な研究を進展できる能力を有していると評価した。そして、研究遂行に十分な英語読解能力を有していると判断した。研究発表、質疑応答での態度は真摯で礼儀正しく、研究への熱意が伝わるものであった。以上より沼田 雄君は、学位(博士)授与に値すると評価した。	